
ハロー・ウィン！

涼海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロー・ウィン！

【Nコード】

N35330

【作者名】

涼海

【あらすじ】

ありきたりなお棺に飽きたバンパイアがやってきたのは、エジプト。

きれいな宝石のついた、お棺をみつけたのですが・・・

「なんで、吸血鬼は黒い棺おけじゃなくっちゃ
いけないんだろう。しかも、内側は趣味の悪いピンク」
ああ、うんざり〜つかれたーって顔をして、
一人の吸血鬼は空を飛ぶ。

ヨーロッパ中、「トリック・オア・トリート」と
子どもたちがお菓子をもらいにうきうきしている中で、
”当の本人”は、お目当てを探しに遠征。

「そーんなに、黒いのが嫌なら、どうだ、
エジプト行つて来いよ！」

吸血鬼仲間にしては珍しい、考古学に凝つてて、
しょっちゅう砂漠地帯に行く友人が教えてくれた
エジプトへとフライハイ。

気のせいか、満月がジャッコランタンに見える。

それでも、いいお棺が見つければ、
帰りには面白いと思えるだろうと思って
飛び続けた。

いわゆる観光地扱いのピラミッドじゃなくて、
比較的目立たない”盗掘されてなさそうな”ピラミッドを
見つけた。

めっけものには、鋭い目を凝らしてみると、
半分砂漠に埋まったところに中への入り口を発見。

飛びつかれてへとへとだけど、
なんとか入り口の石を吹っ飛ばして、
通路をとぼとぼ歩き始めた。

かび臭くて真っ暗な通路。

でも、吸血鬼には慣れっこ。

いつもの寝床はそんな感じだしね〜って、
鼻歌が出てくる。

やっと突き当たったところで、指をぱちん。

かつての松明に火が灯る。

「うん、あ、あつた！」

部屋の奥まった真ん中に・・・

博物館で見たことのあるものより、品があつて、

キレイな装飾が施されたお棺があつた。

金ぴか、色んな宝石の施され様が、

僕の好みだ〜

吸血鬼は、思わずそのお棺に頬を摺り寄せた。

ゴトっ

ちよつと重いものがゆすれた音がした。

「うん？」

コンコンと軽く拳でたたく。

と、

「ガッターーン」

頬を寄せていたお棺の蓋ごと、吸血鬼は吹っ飛ばされた。

「ちよつと！人が気持ちよく寝てるのに、

なによーーー」

中から勢いよくミイラ・・・というには失礼な、

女の子が出てきた。

「な、な、なんだ」

「なんだは、こっちの台詞！あんたこそ、なによっ」

「ぼ、僕はお棺を探しに來ただけで・・・」

「は？で、私のお棺を捕ろうとしたわけ？」

「いや、まさか中に君が・・・人がいる・・・な」

ふと吸血鬼は、その中にいた女の子を下から上まで見た。

お棺「中身は干からびたミイラだと思っていたのだが、

今日の前にいるのは、ぼろけた包帯をまとった

みずみずしい女の子だ。

ちよつと、血を吸いたくなるような・・・

「君、ミイラだよね・・・」

「まあね」

「なんで、干からびてないの？」

女の子は、きょとんとしてから、大笑いし始めた。

「あ、あんた、どうせ」お決まりのお話”しか知らないんでしょ。

ミイラはね、全部が全部干からびてると思つたら

大間違いよ。

正確には”干からびっぱなし”だと思つてるのは、

間違いだわね」

笑われるは、今まで思っていたことが違つと

言われた吸血鬼は、呆然とした。

「私は、若くして亡くなつて、とうさまがそれはそれは、

惜しんで”できることなら、若く美しく生き返り、

人並みの幸せを”と願つて、最高の魔法をかけてくれたの」

吸血鬼はやつと「はあ」とだけ言つた。

「私は、その魔法が相当上手くいった様で、

とうさまが色々用意してくれた”生きて行くための品物”の

おかげでこうしていられるの」

樂しげにニコニコする女の子に、吸血鬼はこの部屋に感じていた

違和感を言つた。

「でも、ここで君は一人だつたんだよね」

そうさほど大きくない声で言つたのに、女の子はシュンとした。

「・・・そうよ、ここで本読んでたまにそつと外が見えるかなって覗いて見たり」

床にペタンって座る女の子が、これ以上小さくなりやしないかと吸血鬼は妙な心持がした。

「ねえ、外には出れないの」

「出れなかった、でも、あなたが入ってきたから、出れると思う。だって、とうさまが”いつかお前をちゃんと迎えに来れる男が外からやってくるだろうからね”って言っていたから」

そう言って笑う笑顔が、まだうれしさとは程遠い。吸血鬼は思わず、抱きしめていた。

「僕と行こう」

女の子は、小さく「うん、でも」と言った。

「少しづつ、光になれないと・・・だって1000年以上、外に出ていないもの」

「そうか・・・じゃあ、僕がこれから、ここへ来るよというか、住む！」

「え？」

「だって、君のお棺気に入っちゃったし」

照れくさそうに笑う吸血鬼に、やっとミイラの女の子は楽しげな声をあげて笑った。

それからかれこれ5年経って・・・

忘れかけそうな黒い森の影色の城に、やけに陽気な風を封じた手紙が届いた。

屋敷の主は、ことさら眉をひそめてその手紙を読んだ。

「なになに・・・」とうさん、僕は今エジプトにいます。

やっと気に入ったお棺を見つけました。

ついでに、お嫁さんも見つけて、この前ふたこの男の子が生まれました。

かわいいもんです。足が達者になったら、連れて帰りますね。

ちよつと乾燥している空気には、ときに辟易しますが、楽しくやってます』とな。

はあ、あの子は昔から変わっているとは思ってたが、あんな日差しが強くて、乾燥のきついところにいつくとは」

飽きれて、暖炉の火にくべようとした手紙を

別の吸血鬼が拾って、「いいじゃないですか」と言つた。

「彼がほつとできるお棺と家族が見つかったんですから」

「それにしても、はてどんな嫁を娶つたのやら」

呆れる父親に、手紙を手にした吸血鬼は、ただただ微笑んでいました。

エジプトに居ついてしまった吸血鬼は、

今日もピラミッドの上でサングラスをかけて日光浴、

奥さんの”ミイラ”は子どもたちにお乳をくれながら、

「お昼を買ってきて」とダンナに声をかけてます。

ダンナは、悠然と黒い翼を広げて、

街へ、カイロのフライドチキン屋へ出かけるのです。

今では、お棺よりも奥さんの膝枕の心地が、たまらないようです。

（後書き）

全くもって、この時期ならではの行事？から、

思いついたことを、思いつく先から書いてみました。

稚拙で、どうもいかなと思うところもあるかと思いますが。

ただ、こんなこともあっていいんじゃないかと描いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3533o/>

ハロー・ウィン！

2011年5月12日10時58分発行